時間のない時間

無時間的時間

芒克（マンク）

訳 是永駿

le livre de luciole

芒克（マンク）

訳 是永駿

時間のない時間

時間のない時間＊著者芒克訳者是永駿＊一九九一年一二月三〇日初版第一刷発行＊装幀者亜令＊発行者鈴木一民発行所書肆山田東京都豊島区南池袋二-八-五-三〇一電話〇三-三九八八-七四六七＊印刷共信社イナバ巧芸社製本山本製本所＊一三九八-一二六八-三四二四

時間のない時間／芒克／是永駿＝訳

書肆山田

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

目次――

時間のない時間　5

〈あてどもない遊行者〉――芒克『時間のない時間』をめぐる断章　浅見洋二

時間のない時間

第一篇　序

ここに、もはや感情は育まれず
ここは一面つるりと禿げた時間
暗くて寒い
ひっそり閑としてがらんどう

ここは一面灰塵に覆われた時間
もはや記憶もなければ思念もない
期待もせず、希望も抱かぬ
ここにかつてきみの生きた時間があった
わたしの生きた時間もあった
ここはいま時間のない時間

ここに、生と死はすでに境界を失い
生きてあることの証明をわれらは必要とせず
われら始まりをもたざれば
終りあるを知らず
終るはただ終るべき時間のみにして
われらはやはりわれら

わたしとわたしとの間を画するものもなく
わたしの過去はそのままわたしの現在の鏡であり
わたしの現在それは未来の倒影
ここに、生と死はすでに境界を失い
わたしに死を惧れる必要はない
わたしはわたしにつきそい
わたしを知る
そはわたしがわたしなるがゆえ
きみが人間の目でわたしを見れば
わたしは別のひとりの人間にすぎない
人を人と見なすは人間のみ
人を人と見なしゆけるも人間のみ
わたしはわれらを擁することも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

失うこともできる
わたしはわたしを所有することも
所有せぬことも許される
わたしが生きて必要とするものは所有すること
非所有にあらず
所有せぬことにもましてわたしを虐げるものはない
われら始まりをもたざれば
終りあるを知らず
われらはわれらの始まりでもなければ
終りでもない

ここは一面つるりと禿げた時間
ここは一面灰塵に覆われた時間

ここは時間のない時間

思うに、わたしの出現は
きみに意外な感じを与えはしまい
まさしくきみの出現も同じく
わたしを驚かせはしない
われらはわれらを不思議とは思わぬ
何の不思議があろう
不思議に思うはおそらく
人と人との根本なる分岐に分岐がないということかも知れぬ
われらは生きて
生きていることをわれらは知る
われらがロゴス、そはなべてわれらがもの

わたしがわたしのロゴス
見よ、わたしはいままた現われ、ここへ来た
端正にしておおらかに
だがわが思い
降りしきる大雪にも似て
ここに在るわたしの
全身がしだいに純白に変りゆくのを感じる
わたしはすでにわたしではなく
わたしには一点の汚れもない

第二篇

1

風は岩肌を噛み
その刃を研ぎ澄ました
轟音とともに
闇の夜が大地に倒れ伏し
その巨大なるものは皮を剝がれ
一太刀浴びて腹を割かれ

たちまち、一塊の真紅の肉
ころがり出づ……
そは生まれ落ちたる太陽
だがその光にははや老いの色
杖をたよりに地上を歩みゆく

2

わたしはいま夢の中の水辺から這い上がり
ぐったり、びしょ濡れ
さて、われらは今日何をなすべき
わたしはもうひと眠り、ひと眠りしたい

3

われらの尻尾をしっかりとからませて
わたしはぐったり、びしょ濡れ
始終いびきをかいてるおまえは
雷の息子、夢に見しや
あの海中の琴を
あの琴の音のなんと心地よくたゆたうことよ
わたしはもうひと眠り、ひと眠りしたいのだ
わたしに向かって
へその口をあんぐりと開(あ)けないでくれ
乳房の目を大きく見開かないでくれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook